# “号外,,

平成 24 年 1 月 11 日

発行所:四国時報

〒768-0011
観音寺市出作町 603-3
電　話　0875-25-6883
編集発行人　木下　俊明

平成 23 年 12 月 5 日「四国タイムズ」川上より挑戦的な虚偽内容の中傷報道を受け、即日抗議文を送り、後の動静を注視していたところ懲りずに平成 24 年 1 月 5 日付発行紙に、さらなる虚偽内容を加えた報道を行うとゆう不法かつ暴挙な行為にでてきた、四国時報編集発行人　木下　俊明としては看過できない内容であり、民法に抵触する「不法行為」であるとともに、憲法の「表現の自由」の範中を超え、また「権利の乱用」にも該当するものであり提訴し「法の鉄槌」を下し、四国時報編集発行人に対する虚偽報道による不法を糾弾することに決しました。

さて、なぜ、この時機に四国時報編集発行人への挑発を行ったのか、その背景を推論したところ、四国時報創刊を知った川上は、自らの物差しでもって四国時報の報道姿勢等に過剰な意識と自らの報道体質に比して危機感を抱き、そこでかねてより川上と親交の深い、関西筋の情報提供者の人生運勢の不運や恨み話を聞いていた、そこで、恨みと悔やみ話を組合せ目障りな「四国時報」及び編集発行人の社会的信用の失墜を、目論見、関西筋の情報提供者の個人的な怨念晴らしと、また川上が抱いた「四国時報」が目障りと両者の思惑と利害が一致した上での事と、容易に判断できる内容であり先ずは「叩いておこう」と企み事実をあえて歪曲さし、さも現下の社会的風潮に反するかのような表現は卑劣で悪質の極みでもある。

そして川上は自ら逃れようのない不法行為の証明を行うとゆう愚を犯しているではないか、それは文字・活字による動かしがたい証拠を記していることと、特に報道を商いにする者にとって、文章・文字・記事内容等に責任が伴うことは当然言うまでもない。

これまでの川上の報道内容の多くが誹謗・中傷を誰かれの見境なく行ってきた川上は厚顔にも自らを、なんとラストサムライと自称し、自画自賛しているようだが、世間は冷笑しているようである、自らをサムライなどと勝手に思い込むのは自由だが、本来それは、世の人々が評価することであり「あの人は古武士のような風格がある」とか「あの人こそ本当の武士だ」と、言われるには武士道を身に付けた所作や行動に礼節や節度の備わった人物を武士(サムライ)と尊称するものである。

川上発行の四国タイムズは個人のプライバシーを悪罵し非礼悪態等、何でもありで、しかも品格・品位に欠ける表現も散見され、よくもこれでサムライとは厚かましいではありませんか。

武士の風上にも風下にもおけない野武士か野伏の類との誹りを受けても仕方のない所業である。

川上は知事と、観音寺市の某所において、仲介人を含み秘密裏に会談するが、意図

裏面へ続く

を拒まれた事を恨んで、某市長に執拗にプライバシーを卑劣な記事でもって圧力をかけ続けて、ついに川上の術中にはまった解決処理が行われピタリとペンの攻撃は終わった。

世間ではこの解決の仕方・方法を「推して知るべし」と噂し合っている。

確かな筋より四国時報編集発行人にもこの解決の経緯は詳細に届いている。

風の便りで川上は県議会等に度々徘徊し傍若無人に振舞っているそうだが、県議員さん達は諺にあるように、さわらぬ神に祟り無と、川上に先生、先生とお追従して、あしらっているようである。

川上は、毎号に自分が拳銃で襲撃された事件を書き続けておるが、心ある読者から見れば、川上は事件の再発を極度に脅えてのことで、毎号に書き続けることにより再発を抑止・抑制し続けている様にしか映らない。

現に今回の四国時報編集発行人の至極当然の抗議文を歪曲して記すなどは、知事の事をへらこいと言って罵っておるが、川上こそが、「へらこい奴」だと言われても仕方ないのではなかろうか。

四国時報編集発行人の見るところ、これまで多くの人達は反論も攻撃もせず、只、泣き寝入りするか、無視しておりますが、此度、四国時報編集発行人は突然に、いわれ無き挑発を受けました。

つまり喧嘩を売られたわけでありますので、「正攻法」と「報道には報道」の両面において敢然と立ち向かってまいります。

人物を見極める方法に「えせ侍の刀いじり」という諺がある、えせは「似非」と書き意味として、臆病な武士に限って、人前で、やたら刀をいじり強そうに見せかけると言うことです。

「出る杭は打たれる」は世の習いですが、四国時報編集発行人は肝を括って対決する所存である。

飛んで火にいる夏の虫と挑発しているが、川上は身体に鉛の弾を撃ち込まれ又、鉄棒で襲われたと毎号で言い続けているが、川上自身も言葉・文章と言う「口鉄砲」で多くの人の心を傷つけている事を自覚しなければならないであろう。

体の傷は治せるが、心の傷は治りにくいという事を知るべし、通り魔とか天災地変、交通事故は別にして、川上が受けた暴力事件はそれなりの原因・起因が有ったのではなかろうか。

言葉も文字も使いようでは、刃物や銃器以上の凶器になる!!「因果応報」の習い。

川上　道大「道に大」の名に恥じぬ所作と行動されんことを進言しておきます。

尚、抗議文の「相当の対応とは」読んで字のごとく、本号外、及び提訴もその一例である。（文中敬称は略しております。）

最後に川上氏に、当、四国時報の PR をして頂いた、お礼を申し上げます。

四国タイムズという、歴史とブランド有る紙面に掲載頂き誠に有難うございます。

事と次第で、反撃は、今後も続く。